

平成 21 年 6 月

三文の徳にやあらむ朝寝また  
子規さんの下あご強し柿を食ふ  
七年目の浮気に吹くや隙間風  
繁りすぎ鬱状態の夏木立  
沈めても懲りずに浮かびくるトマト  
ジスワンとメニューの酢牡蠣ゆびさして  
下萌ゆる雑草名草のへだてなく  
執拗に叩かれている布団かな  
自転車の新しければ風光る  
自転車のサドルの硬し木の芽風  
朱の色を煮詰めたやうな烏瓜  
少女だてらに剛速球の雪つぶて  
少女べた座る繁華街の夜長  
新米と呼ばれ直立新社員  
進物の箱に角ばり富有柿  
新涼のゆふべの豆腐屋のぷああ  
水仙を描くおしまひに葉と茎と  
すきとほるとは白梅の白のこと

すぐに焦げつき短日のフライパン  
すぐ飽きる案山子の真似の片足立ち  
すぐにでも弾ける構え鳳仙花  
スズムシや鬚のタクトを振つてゐる  
ステテコが制服冷奴食ふ父は  
砂粒まみれの三句を眺め休暇明  
すべりやすきは初霜の丸木橋  
炭の眉太きは父ぞ雪達磨  
するするはとかげのためにあることば  
セーターを編み上げ恋のをはりかな  
背負はれて眠り子となり七五三  
せつかちとのんびりのある春隣